

サトリの
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

日蓮宗永昌寺住職
田端義宏さん

第92回

お寺を教育の場として
子どもをたくましく育てたい

たばた・ぎこう 1940年生まれ、青森県出身。立正大学宗学科卒業、同大大学院修了。1978年より永昌寺住職。日蓮宗伝道部長、青森県教員委員などを歴任。現在は日蓮宗常任布教師、日蓮宗青少年教化ネットワーク会長などを務める。1969年から毎年、寺内で夏期修養道場「海辺のつどい」を開催。仏教精神に基づく青少年教化の功績が認められ、第42回正力松太郎賞本賞受賞。

私は約50年前から毎年、夏休みにお寺で子ども向けの修養道場「海辺のつどい」を開いています。対象は小学4年生から中学3年生まで。2泊3日で、お寺で集団生活をしします。当初は50人を超える受講者が集まりましたが、少子化が進んだ今は毎年25人ほどです。

一般的な子ども会活動などでは、歩くスピードから話し方まで、低学年の子どもに合わせて行動するでしょう。でも、それを中学生が喜ぶはずがありません。だから「海辺のつどい」では中3を中心にしたペースで行動します。一番

下の小4の子には「中3に合わせるがなれば」と言います。「一緒に伸びようと」思ったらついてこい」と。おも

しろいもので、そうすると小学生はものすごくがんばります。上に伸びようとするのです。それが子どもの良さです。お寺ですから修行もします。1時間〜1時間半、畳の上に正座してお経を唱えます。修了後にアンケートを取ると、「つらかったこと」に全員が「修行」と書きます。でも、中学生くらいになると「ためになったこと」にも「修行」と書く子がいます。つらいけれど自分のためになる、そう思えるのも子どもの素晴らしい感性です。

自主性を尊重し、時に叱る。 それが「海辺のつどい」のルール

よく「今どきの子は」などと言いますが、今も昔も子どもはたくましさや好奇心は同じ。変わってしまったのは周りの大人の対応です。親は腫れ物を扱うように子どもに接し、顔をうかがいます。学校でも先生は子どもを叱りません。教育現場で教育ができなくなりました。その結果、子どもが弱くなっていました。でも、お寺では教育ができます。中学を卒業した子どもたちは翌年からはOBスタッフとして参加し、



上／毎年7月末に行われる「海辺のつどい」。修行のほか、海水浴などの楽しい時間も。
下／青森県鰺ヶ沢町にある永昌寺。本堂には日本一大きい木彫りの鬼子母神像が祀られる。

受講生を指導してくれます。活動内容を考えたり、全体に指示を出したり。後輩を叱るのも彼らの役目です。受講生もOBも共に学び、成長していきます。すべては子どものため。今の時代だからこそ大事な活動だと思っています。

子どもが集えるお寺で 情操教育を行うことが大切

この「海辺のつどい」をはじめとした子どもたちへの教育活動が評価され、今年、第42回正力松太郎賞の本賞を受賞しました。現在は日蓮宗青少年教化ネットワーク会長も務めています。日蓮宗のお寺は全国に約5200ありますが、子どもを対象として活動しているお寺は少ないのが現状です。

現在を支えているのは過去の子どもたち、そして未来を支えるのは現在の子どもたちです。その子どもたちにお寺との縁や信仰心があれば、未来はないと考えます。未来作りは今。お寺を子どもが集まる場所にしたい、子どもに気持ちを向けるお寺がもっと増えれば——そんな思いで活動しています。